

東南アジア古典文化論:インド化(Indianization)

1. 「インド化」とは

- ・西暦紀元前後から始まった東南アジアにおけるインド文明の受容。「インド化」を主題としたもっとも基本的な文献はセデス(1968)である。
- ・セデスは「インド化」を次のように定義している(1968: 15-16):
 - イン底的王権概念に基づいた文化体系の地理的拡張であり、ヒンドゥー教もしくは仏教の信仰、プラーナ諸文献の神話、ダルマシャーストラの順守によって特徴づけられ、サンスクリット語によって表現されるものである。
- ・セデス:サンスクリット語による表現という点に注目すると、「インド化」は「サンスクリット化」(人類学の用語としては特別な意味)と呼ぶことができる。
- ・サンスクリットを記録する手段としての南方系ブラーフミー文字の伝播と普及にも注意(青山 2002)。
- ・インド化は、インド本土において進行していた現象の海外への延長
 - ・「東南アジアのインド化は最初期に北西インドにおいて進展した「バラモン化」の海外への延長である」というセデス(1968: 15)の指摘は、インド化の性格を理解する上できわめて重要である。
 - ・セデス(1968: 15)はさらに「東南アジアの最初期のサンスクリット刻文の出現はインド本土の最初期のサンスクリット刻文の出現からさほど隔たっていない」ことをその例証としている。
 - ・セデス「[東南アジアに移植されたサンスクリットないしはインド文明と]ベンガルの「サンスクリット文明」との唯一の違いは前者が海を通じて広がったのに対して後者が陸を通じて広がったことである」

2. インド化はいつから・どのように始まったのか?

- ・「長い助走期間」単にインド人が来訪していた、インドの文物が伝来したというだけでは「インド化」とは言えない。逆に、インド人の「支配」があって初めてインド化が可能となったとも言えない。
- ・インド人の東南アジア認識:
 - ・紀元前後からあり。ジャータカにおける航海者の物語。『ラーマーヤナ』における言及。パーリ仏典 Niddesa における言及。
- ・航海技術の発達
 - ・モンスーンの見(<mausim アラビア語「季節」)「ヒッパロスの風」紀元後 1 世紀頃。
 - ・『エリュトラ海案内記』1 世紀頃。
- ・インド化の担い手は誰か?
 - ・「クシャトリヤ」(武士階級)説:インド人による軍事的征服
 - ・「ヴァイシャ」(商人階級)説:商人の来航
 - ・「バラモン」(学者・知識人)説:F.D.K.ボス。紀元後 1-2 世紀に大乘仏教が発達し、海外への布教活動がなされた。僧侶の海外布教は交易ルートの確立と関係。5 世紀頃には中国人僧のインド留学も開始(法顕 5 世紀前半、玄奘 7 世紀中頃、義浄 7 世紀後半)
- ・扶南建国神話
 - ・碑文史料:バラモンのカウンディンヤが渡来、現地首長の娘ソマーと結婚して建国。
 - ・『梁書』(6 世紀)『南齊書』:柳葉という女王が統治していたところへ、模倣国の混填が扶南外港に至ってこの地を占領し、柳葉と結婚して扶南の最初の王となった。
- ・オケオ(メコン川下流西方)
 - ・2・3-6・7 世紀に港市が存在し。南シナ海とタイ湾を結ぶ中継基地。扶南の外港。
- ・5 世紀—インドネシアの初期王国の成立と「インド文化の爆発的な東漸」
 - ・5 世紀、Kutai 碑文。Mūlavarman<Aśvavarman<Kuṇḍunga
 - ・5 世紀、Tāruma 国。Pūrnavarman
- ・東南アジアの「インド化」とインド文化の「現地化」

3. インド化を進めたインド側の状況

- ・インド古典文化の完成と普及
 - ・グプタ朝(320-550)におけるインドの古典文化の完成>サンスクリット文化が規範化する。
 - ・グプタ朝の崩壊にともない、サンスクリット古典文化の中心がインド各地方に出現。とくに南インドのインド化(サンスクリット化)が顕著。6-9世紀、パッラヴァ朝の発展
- ・大乘仏教(密教)の発達と東漸
 - ・2-3世紀頃、竜樹(中観)、5世紀頃『華嚴経』(毘盧舎那仏)。
 - ・ナーランダール僧院(5-12世紀)が仏教の教育センターとして機能。
 - ・奈良東大寺大仏盧舎(遮)那大仏の開眼供養会 752年(天平勝宝4)。インド人バラモン菩提僊那が開眼導師となり、林邑樂などが演奏された。
 - ・ボロブドゥール(850-950年頃)。中部ジャワ。『聖大乘論』

4. カースト制はなぜ東南アジアに導入されなかったのか？

- ・カースト制はインド文明の根幹であるが、東南アジアには定着しなかった(概念は知られており、現にバリ社会においては形式的ではあるがカーストがある)。
- ・カースト制:ヴァルナ(ブラーマン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラ)とジャーティ。浄・不浄の観念に基づく階層制度。出自に基づく職業集団を形成。
- ・「多様な構成メンバーからなる人口の集積」(応地 1997: 391)が前提。対して東南アジアは小人口社会。
- ・カースト制とくにジャーティ制はインドにおいても後代になって発達。

5. 東南アジア(ベトナムを除く)はなぜ「中国化」しなかったのか？

宿題

- ・大学のパソコンから以下にアクセス:
<http://www.tufs.ac.jp/common/library/local/online/ondb-j.html>
- ・Gale Virtual Reference Library に接続
- ・Basic Search の枠に「Indianization」と入力し検索。ヒットしたリストから以下のリンクをクリック:
[Hinduism in Southeast Asia](#). Vasudha Narayanan. *Encyclopedia of Religion*. Ed. Lindsay Jones. Vol. 6. 2nd ed. Detroit: Macmillan Reference USA, 2005. p4009-4014.
 (必要なら View PDF pages をクリックして PDF ページを表示し、プリントアウト)
- ・この論文の中の Indianization について議論をおこなっている部分(p.4010)を読み、800字以内の日本語に要約してください。とくに、現代の東南アジアにおいて古典インド文化の影響がもっとも残っている分野があきらかにまとめてください。来週の授業時間中に提出。

参考文献

- Coedès, G. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*. Orig. French ed. 1964. Eng. ed. by Walter F. Vella, tr. by Susan Brown Cowing. The University Press of Hawaii.
- Narayanan, Vasudha. 2005. "Hinduism in Southeast Asia." *Encyclopedia of Religion*. Ed. Lindsay Jones. Vol. 6. 2nd ed. Detroit: Macmillan Reference USA, pp.4009-4014.
- 青山 亨. 2002. 「東南アジア島嶼部におけるインド系文字」『上智アジア学』20. pp.11-24.
- . 2007. 「インド化再考—東南アジアとインド文明との対話—」『総合文化研究』10. pp.122-143.
 電子版<<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/28733/1/tcr010008.pdf>>
- 池端雪浦編. 1994. 『変わる東南アジア史像』山川出版社。(とくに深見純生、石井和子論文)
- 応地利明. 1997. 「インド化」『事典東南アジア』弘文堂. pp. 390-391.
- 横倉雅幸. 1997. 「ヒンドゥー文明の受容」『事典東南アジア』弘文堂. pp. 262-263.
- 横倉雅幸. 1992. 「東南アジアの初期農耕」『東南アジア研究』30:3. (農耕技術のインド化について)